
人工人間

虹雪まい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人工人間

【Nコード】

N6959L

【作者名】

虹雪まい

【あらすじ】

知らず知らずのうちに、居場所を探していた。見つけれないと知りながら、ずっと探し続けていた。見つかるどこかで信じていたから幸せだった。見つからないと気付いた時…全てが…崩れていた。

（前書き）

悲しい運命をたどった人々を描く鬱々とした作品です。あまり書かないジャンルに挑戦しようとしたら、暗くなってしまうた^^；

気持ちが落ち込んでいる時やハイテンションを維持したいときには読まないことをお勧めします。その点に関しての苦情は受け付けできませんのでよろしくお願いします。

一緒にいられるだけで幸せだった。
ずっと、一緒だと思っていた。

目の前で、母親が死んだ。父親も、すぐにそのわきに倒れた。私はクローゼットの中で、ただその様子をひっそりと眺めていた。幼かった私に唯一出来たのは、その後部屋中の引き出しという引き出しを物色した殺人犯が立ち去ってすぐ、助けを呼ぶことだけだった。

私は、ユリアという名前の、女性型人工人間じやうこうにんげんである。人工人間とは、現代におけるクローン技術を応用した科学技術によって人工的な方法で生み出された人間もどきをいう。

見た目も精神的な面も全ては人間同様。何も変わらない。しかし、開発者にはその何も変わらないという事実がお気に召さなかったらしく、わたしたち人工人間は信じられないほどぞんざいに扱われた。それはもう、奴隷同然に。

そんなこんなで私たちのご先祖様ともいうべき第一団の人工人間は人として扱われずに死んでいった。実際、血は繋がっていないのだけれど、『製造法』が一緒なのだから、間違っではないはずだ。それから何十年かして、研究者がその成果を公表した。それが私たち人工人間の運のつきともいえよう。

だって公表されなければ、こんな目に遭うことはなかったのだから……。

「畜生！！何で…何でお前はここにいるんだ！」

「えっ…」

「二人は死んだのに…なぜお前だけがここにいる！」

両親を失った私に浴びせられたのは、罵声と冷たい視線だった。

先にも言ったように私は人工人間だから、両親、というのは適当ではないかもしれない。正確に言えば、業者に私を『造る』よう依頼して、云千万という大金を払って私を実子のように育ててくれた夫婦である。ちなみに私は自分が人工人間であることを、物心ついた頃に母から丁寧に教わっていた。その方が私にとっていいと、そう考えてくれた母の気遣いであつた。

人工人間への差別は、幾年が過ぎようとも、悪化はすれ、消えることなど無かつた。その例が、今ここにいる私だった。

「ごめんなさい…」

「謝って済むと思っっているのか？！」

「あなた、やめて！」

「…ちっ…」

止めた彼の妻も、こちらを見る目は決して温かいものではなかつた。

両親の親類は皆、幼い私に両親が死んだ責任を全て押しつけたのだ。

（人工人間を、彼らはスーパーマンか何かと勘違いしているのだろうか。）

最初はそう思っていた。

…もしそうなら、どれほどよかったか。

「大人げないわ。どうしてそんなことを言うの?!」

「お前は許せるのか!?!何でこんな化け物だけが残ってあの二人が

死ななきゃならなかったんだ……！だから俺はあんなに人工人間なんか受け取るなって言ったのに……！」

その言葉を聞いたとき、私はようやく自分の置かれている状況をはっきり理解した。

……私は、要らないのだと。

（パパとママが死んだのは私のせい。私が二人の代わりに死ねばよかったんだ。）

おんがしん
幼心に、そう思った。

葬儀の夜、私は沢山泣いた。両親の死への後悔が、涙となって流れ落ちた。

それから三日後、もちろん私を引き取るうなどという親族は現れなかったため、私は人工人間専用の施設に入れられた。

施設は私にとって、驚きに満ちた場所だった。

「みんな、新しく入ったユリアちゃんよーっ。」

私は、一人をさみしいと思ったことがなかった。一人が当たり前だと思っていたから。

周りは無関心。それが、幼い私の『普通』だった。それを『冷たい』と思ったことはなかった。

「はじめまして。」

適当にあいさつ。その時点で私は施設内の設備を見まわして、面白そうな絵本やお絵かき帳を見つけていた。他の子と遊ぶなんていう考えは端からなかった。

「わ、かわいーっ！」

「ユリアちゃん、こっちおいでよ、あそぼっ！」

「……え……？」

だからこそ、そこは私にとって驚くべき場所だった。

「おままごとする？」

「ヒーローごっこしようぜ！」

「ええ？ブロック遊びだよお！」

「おにんぎょうあそびよね？」

みんなこぞって私を遊びの輪に入れたがり、ニコニコとこちらに笑顔に向けた。私は頭が混乱してしまい、目を瞬かせて首をかしげた。

すると、それに気づいたらしい一人の少年が、みんなをかき分けてこちらへやってきた。

「おいおい、ユリアこまってんじゃん。」

「あ……」

彼はそう言ってみんなを止めると、ガシッと私の手を握った。そしてニカツと笑うと、キョトンとしている私にこう言った。

「ここは、ユリアのともだちがいっぱいだぜ！ユリアの好きなことしていいんだ。」

それから彼は私の手を握ったまま振り返ると、周りの幼児たちに笑いかけた。

「なあ、おにごっこしようぜ！みんなであそぼ！」

「やるやる！」

「よし、きまり！おれ、おにやりたい！」

わーっと散っていく子供たち。中央に取り残され、私は自分の手を放そうとしない少年を見つめた。彼はそれに気づいてまたニカツと笑うとこう言った。

「ユリアもおになつ。おれといっしょーっ。あ、おれカイスっての。よろし……く……！？」

「？」

彼は、こつちを見たまま硬直した。私はその理由が分からず、首をかしげる。

「ごめん！おにごっこきらいだった？！」

「え？」

「だって…ユリアないてる…。」

言われて初めて気付いた。私の目から、涙がぼろぼろと零れ出していた。

いまならわかる。初めて触れた優しさが、とても心に染みたんだ。今まで感じたことのない温かい空間。私は、感動で涙を流していた。

「…うん。おにごっこって、やったことないの。えっと…おしえてくれる？」

「だいじょうぶなのか？」

「うんっ！」

私はその日、生まれて初めて本気で笑った。

そこは私たち、人工人間を隔離するために生まれた施設だったのだけれど、皮肉にもそこは私たちにとって、天国の様な場所だった。なんせ中にいるのは皆人工人間なのだ。外にいれば痛いほど感じる人間の軽蔑の視線も此処にいれば気にすることはない。しかも国営であるため、衣食にもまったく困らなかった。

そこには様々な年代の様々な人種の人たちがいた。お年寄りにはいろんなことを教わったし、同年代の子たちとは沢山遊んだ。そしてある程度の年齢になると、小さい子たちに勉強を教えた。

ここにいてもいいのだと、はつきりと感じることができた。

「ユリア、今、暇？」

「え？うん。どうして？」

「話があんだけど、いい？」

信じられない話だった。

「ユリア、真剣に聞いてくれる？」

「え？うん…。何？」

「…好き。…俺と、付き合ってください。」

「！…カイス…！」

「俺ガキだし…全然ユリアのこと大切に出来ないかもしれないけど…一緒にいたいんだ…」

「…ううん。私もカイスのこと好き。…大好きよ。」

私は、そんなカイスが大好きだった。すごく、すごく大好きだった。

私たちは毎日一緒だった。これもまた、この施設にいるから出来たこと。周りもすごく祝福してくれて、私たちは、幸せだった。

私はある日、全然知らないところで目を覚ました。

いや、知らない、というのは間違いだ。

そこは昨日カイスと一緒に寝たその部屋で、間違いなかった。

「…カイス？」

思わず呼びかけるも、そこに彼の姿はなくて。起き上がって部屋中を見回して、机の上に一枚、見覚えのない紙を見つけた。

「…嘘。」

それしか、言えなかった。そこに置いてあったのは、非情な文字の羅列。

でもその紙で、全ての説明はついた。

消え失せていた彼の荷物も、いなくなった彼の消息も。

― 人口現象における男子不足により、全ての人工人間保護施設に健康なオスの人工人間の提供を求む。―

オス、か。と、その時改めて人間の人工人間への差別の大きさを思い知らされた。

カイスは施設から強制的に連れ出されたんだ。しかも、人口増加のためだけに。

そして、私は気付いた。…気づいてしまった。

人口を増やすということは、子供を増やすということだ。つまり、カイスは…

「…どこかの知らない女性と…。」

廊下に出ると、私と同様にポケーっとした女の子がいっぱい座り込んでいた。誰の手にも、紙切れが一枚だけ握られていた。

忘れていた。自分たちは存在してはならないのだということ。ここは私たちの『居場所』ではなく『幽閉場所』であることを。

私は気付けば、その子たちに声をかけていた。

お父さん

お母さん

育ててくれたみなさん

…それから、カイス。

ごめんなさい。ユリアは悪い子です。

本当に本当に悪い子です。

ユリアはわがままな子です。なんにも我慢が出来ないんです。
だって…

「みんな。行こうか。」

2XXX年○月○日。

各地で人工人間保護施設が火に包まれた。

どこもキッチンあたりの燃え方が酷かったことから、コンロの火の不始末だろうという話になった。

その火事で施設内にいた全員、九千八百五十二体が命を落とした。前日にオスのみを連れ出してよかったと、トップは胸を撫で下ろした。

しかし、それは完全なる慢心。

火事が多発した翌日、トップが何人も惨殺されたのだ。

犯行は全て、人工人間のオス、先日彼らの命によって施設から出た者たちによるものだった。

SPが何人もついていたのに防げなかったその事件。理由はすぐにわかる。数だ。

全国の人工人間が結束して、首相やら官僚やら、国を動かす面々に襲いかかった。そうなればSPなど役に立つまい。

その場で、襲いかかった全ての人工人間たちが射殺された。気味の悪いことに、全員がうすら笑いを浮かべて死んでいったそうだ。

それと、後に解った事がある。

インターネットの人工人間向け掲示板サイトに、一言だけ『ユリア』という名前で書き込みがあった。それはシンプルな一文で、誰もが事件とは無関係であると主張した。

その真意は不明である。しかし、その投稿日時が火事の発生時刻であることは確かだ。

『人間じゃ、ないから。――ユリア』

（後書き）

彼らがどうなったのかはご想像にお任せします。バッドエンドは苦手なのですが…おかしな点、有りませんでしたでしょうか…；；もしよろしければ感想などよろしく願います。拙い作品を最後までご覧いただき、ありがとうございました^^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6959/>

人工人間

2010年10月22日00時16分発行